

生活に寄り添う駅・沿線を考える

EKISUMER®

特集 **アートを通じた沿線価値向上**

VOL.65
2025
AUTUMN

生活の中の多様なシーンで
駅を訪れる人々。
駅消費研究センターでは、
そんな人々を“エキシューマー”と呼び、
さまざまな視点から研究しています。

【発行】

jeki

駅消費研究センター

【発行責任者】五明 泉
(株式会社ジェイアール東日本企画 取締役 企画制作本部長)

【駅消費研究センター センター長】真貝幸次

【編集長】町野公彦

【副編集長】松本阿礼

【編集委員】近藤英彦 村井吉昭 和田桃乃

【アドバイザー】加藤 肇 吉江 俊

【お問い合わせ】03・5447・7839

【URL】<https://www.jeki.co.jp/field/ekishoken/>

【制作】

編集

小林英明 佐藤勇人 橋 真美 山田 愛(株式会社レマン)

デザイン

山田紗弥香 速水大助(株式会社レマン)

印刷

新日本印刷株式会社

小誌に掲載しているJR東日本社外からの寄稿文や、対談・インタビューなどでの発言の内容は、必ずしもJR東日本の見解を反映しているものではありません。なお、小誌に掲載の情報は2025年9月現在のものです。

Copyright (C) jeki All Rights Reserved.

■ 駅消費研究センター公式HP
EKISUMER 最新刊および
バックナンバー公開中



■ ジェイアール東日本企画
オウンドメディア「恵比寿発、」
「PICK UP 駅消費研究センター」
連載中



“ 持続可能な沿線づくりに アートはどう寄与するのか? ”

近年、アートを活用した地域活性の取り組みが全国各地で広がりを見せています。その多くは、まちの観光振興やブランド化を目的に自治体中心で行われますが、鉄道会社が、沿線活性やエアーマネジメントの一環として取り組む事例も出てきました。

そもそも、持続的な地域づくりのためには、まずリソースとなる土地の魅力を掘り起こし、地域の住民や自治的活動と協働していくことが必要不可欠です。しかし現実には、経済的な理由や地域のさまざまな関係性のなかで、停滞・対立してしまうことが少なくありません。

その点、「楽しいからやってみよう」という純粋な動機で、誰もが気軽に関わることができるアートは、現代における地域づくりの有効な手がかりになるのではないのでしょうか。

各地の取り組みを見てみると、アートの力によって、地域に思わぬ発見をもたらしたり、地域の難題に取り組みやすくなったりすることがあるようです。芸術祭では、鑑賞するアート作品だけでなく、住民や関係者が協力して準備・運営などを行うプロセスそのものが、関わる方々の自発性や連帯感をもたらすきっかけにもなっています。

こうしたアートの取り組みには、長期的な視点が必要です。たとえ伝わるまでに時間はかかっても、長く持続的な経営が求められる鉄道会社だからこそ、アートの持つ可能性や役割に目を向けていく。そこに、アートを通じた沿線価値向上のヒントがあり、取り組む意義があると考えました。

本特集では、アートを通じたさまざまな地域活動が、沿線の未来にどのように寄与できるのかを探っていきます。



FEATURE アートを通じた沿線価値向上

- [REPORT]** 首都圏の過疎地域でアートによる地域活性の在り方を探る
いちほらアート×ミックス 03
気軽に参加できる「編み物アート」が人をつなぐ
としま編んでつなぐまちアート 05
企業が動かす収益事業としての芸術祭で文化を生み出す
神戸六甲ミーツ・アート 07
- [INTERVIEW]** パイオニアに聞く
媒介としての芸術祭とアートが地域にもたらすもの
株式会社アートフロントギャラリー 代表
北川 フラムさん 09
- [REPORT]** 駅消研の体験ルポ 13
千葉国際芸術祭2025 参加型アートプロジェクト
- [THINKING]** 経済指標だけでは測れないアートの力で
沿線や企業の価値を高める取り組みを 14

SERIES

- [REPORT]** STORE WATCH
CREP さいたま芸術劇場店 17
公園のように好きなときに行って自由に表現
アートを通じて子どもの感性と創造力を育む遊び場
- [RESEARCH]** STYLE WATCH
予想外も楽しい廃墟巡り 18

アートを通じた沿線価値向上

アートで地域を活性化させる事例が、全国各地で増えてきています。アートを通して地域の魅力をあらためて見いだしたり、新たなつながりが生まれたりして、地域が変わっていく事例を探り、鉄道会社がアートを使ったプロジェクトを沿線で展開する可能性を考えてみたいと思います。

首都圏の過疎地域でアートによる地域活性の在り方を探る

いちほらアート×ミックス <https://ichihara-artmix.jp/>

アーティスト、アートディレクター 豊福 亮さん

地域課題解決の手法として 形を変えながら継続する芸術祭

のんびり走るレトロな列車の車窓に広がる田園風景。畑の中にたたずむ木造の古い小さな駅舎が、郷愁を誘います。ここは、千葉県の中央に位置する市原市。都心から1時間余りにもかかわらず、南部には豊かな自然と里山の風景が残る地域です。市原市の27万人の人口のほとんどは、日本有数の工業地帯でも都心のベッドタウンでもある北部に集中しています。田園地帯が広がる南部は過疎化が進み、市を南北に結ぶ小湊鉄道の里見駅以南は利用者が減少。学校の統廃合や商店街の衰退などの課題を抱えています。

そんな南部地域の活性化を目的に、

2014年に始まった芸術祭が「いちほらアート×ミックス」です。歴史、文化、自然など地域のさまざまな資源を現代アートで表現し、その魅力を知ってもらおうと、3年に1度のトリエンナーレ形式で開催してきました。当初は市原市単独で開催し、小湊鉄道や市原湖畔美術館、廃校になった小学校を拠点としていましたが、4回目の2024年は、千葉県誕生150周年記念事業「百年後芸術祭～環境と欲望～内房総アートフェス」として、内房総エリアの5市が舞台に。現在準備中の2027年開催の5回目は、千葉県、市原市、木更津市、大多喜町の4つの自治体が連携する「房総国際芸術祭 アート×ミックス2027」を予定。毎回形を変えながら、地域活性のより良い方法を探っています。

アートは地域を読み解き 伝える力を持っている

いちほらアート×ミックスのアートディレクターを務めるのは、地元の千葉県を拠点に、各地の芸術祭で作品を制作するアーティストの豊福亮さんです。初回からアーティストとして参加し、3回目からは総合ディレクター北川フラム氏の下、アートディレクターに就任。「アーティストは地域を多様な文脈で読み解いて作品にするので、地元の人にも知らない土地の魅力を多くの人に伝えるきっかけをつくることができます」と話します。

豊福さん自身は、市の象徴である工場の夜景をモチーフに、「里見プラントミュージアム」というインスタレーション作品を制作、工業都市としての顔を表現しています。

作品の制作にあたって、豊福さんはまずその地に身を置くと言います。そうすることで出合える、地域特有の風景や風土からイメージを膨らませるそうです。「土地の読み解き方は、アーティストそれぞれです。さまざまな要素を取り込めるアートは、見いだしたものを作品としてその土地になじませて、建築とはまた違ったやり方でより面白い風景がつかれるんだと思います」

芸術祭の作品は、各地域に分散して展示されます。そこには、作品を巡る移動の中で、地域の自然や暮らしに触れてほしいという狙いがあります。「あえて行きにくい所に作品を設置するのは、電車やバスを乗り継いでようやくたどり着くような非効率さの中で、いつもとは違う何かを感じてほしいから」と、豊福さんは言います。

芸術祭の効果は見えても 浸透には時間が必要

いちほらアート×ミックスは、地域の団体や、行政の呼びかけで集まった「菜の花プレーヤーズ」というボランティアによって支えられています。その活動は、会場での受付から点在する作品の手入れまで、多岐にわたります。地域の団体とは、以前から廃校を管理したり、小湊鉄道の駅で手作りのお弁当を販売するなどの活動をしていた高齢者のコミュニティ。芸術祭期間外でも、自主的に常設作品やその周囲を掃除したり、ふらりと訪れる観光客の案内をしたりしているそうです。「屋外にあるアート作品は、放っておくと朽ちていきます。地元の方たちが我が子のように手入れをしてくれることで、芸術祭が成り立っているのです」

いちほらアート×ミックスでは、参加する市民が徐々に増え、地元のコミュニティも活性化するなど効果が生まれつつあります。しかし、市北部の住民は芸術祭があることすら知らない人も多く、まだまだできることがあると豊福さんは言います。「市原にも良い所があるのに、都心に近いことあって地元が見過ごされがちです。見せ方に工夫が必要なのかもしれません」。今後は北部にも作品を展開して芸術祭の認知を広げ、南部へ行く機会の少ない北部の住民にも足を延ばしてほしいと言います。



「音楽イベントのような短期的で分かりやすい結果を求めるのではなく、土地をひも解くアート作品を少しずつ増やしながらか、地域の人々と共に時間をかけてじっくりやっていく必要があるのだと思います」

鉄道を軸に、旅先としての エリアの価値も打ち出す

これまでの経験を踏まえ、芸術祭の新たな形を模索し続ける豊福さん。古代、三方を海に囲まれる房総半島は当時の日本の東端で、フロンティアだったと考えられると言います。外部とつながる海の玄関口としての房総半島というイメージを膨らませる豊福さんは、インバウンドにも注目して次回以降の企画を進めています。海外アーティストの参加を増やし、外国人観光客が増えれば、国内からのさらなる注目も期待できます。「来訪者の延べ人数の増加以上に、何かが変わったという感覚を地域にもたらし、地元の人々にエネルギーを与えることになるのではないかと思います」と豊福さん。また、実は前方後円墳が日本一多いのは千葉県で、市原市にも1500を超える古墳があるとのこと。そんな知られざる古い歴史を掘り起こし、芸術祭の独自のカラーを作っていきたいと言います。

あわせて、小湊鉄道を軸に、自然とアートを楽しむ旅としての体験の提供を打ち出すことも考えています。沿線の高滝駅の

近くや、次回の芸術祭で連携する大多喜町には、グランピング施設などの宿泊施設ができています。いつもとは違う日常を味わえる都心郊外の地域としての価値を感じてもらいたいと豊福さん。

「小湊鉄道には元気でいてほしい。車が交通手段の中心であっても、鉄道の存在は特別です。鉄道が通っていることで、このまちは生きていく感じたりもします。駅に学生時代の思い出がある人も多いですから、情緒的な価値も高いでしょう。駅をギャラリーにしてワークショップを開いたりなど、ただ通り過ぎるだけではないコミュニティの拠点にしたい。次回の芸術祭では、前回よりも多く駅で作品を展開することも考えています」

1. 2021年開催の「房総里山芸術祭 いちほらアート×ミックス2020+」で、五井駅に展示されたアデル・アブデスマッドの「Play it Again」。鍵盤が自動で動きジャズを奏でる作品(撮影: Osamu Nakamura)
2. JR内房線の五井駅から大多喜町の上総中野駅までを結ぶ小湊鉄道。五井駅を出てすぐからのどかな田園風景が広がる(写真提供: 市原市)
3. 上総牛久駅前の深山文具店の壁面に描かれた八木秀人の「全てのエネルギーはここから始まる。」(2024年/牛久里・デザインプロジェクト)。駅前にいると、文具店の店主がお店から出てきて話を聞かせてくれた
4. 豊福亮の「里見プラントミュージアム」(2024年)の順路には、小湊鉄道や市北部の工場で実際に使われていた部品や備品を使った5人の作家の作品やキャプションが置かれ、市原の歴史や産業を伝える(撮影: Osamu Nakamura)



1



2



3

気軽に参加できる「編み物アート」が人をつなぐ

としま編んでつなぐまちアート https://note.com/ssc_sustainable/n/n93e207e4e7ae

株式会社サンシャインシティ まちづくり推進部 小野田健太さん

ワークショップで作った編み物で まちを彩るアートプロジェクト

「としま編んでつなぐまちアート(以下、編んでつなぐまちアート)」は、池袋エリアの公園や施設を編み物で彩るアートプロジェクト。株式会社サンシャインシティ、一般社団法人Hareza池袋エアーマネジメント、株式会社日比谷アメニスが主催し、2021年から2024年まで4回にわたって開催されました。毎年秋ごろから、公園やカフェ、劇場内のイベントスペースなど豊島区内の各所で、20cm四方のモチーフを編むワークショップを展開。集まったモチーフをつなぎ合わせて、公園や施設の木々や街灯などに飾り付け、11月末からおよそ2カ月間展示しました。2025年度は、これまでに作った編み物をラグや膝掛けなどにリメイク。展示に協力した公園や商業施設に寄贈し、4年間のプロジェクトを完了する予定です。

編んでつなぐまちアートの発起人は、サンシャインシティです。2020年にまちづくり推進部を発足させ、複合施設「サンシャインシティ」の運営だけでなく、近隣地域の

さらなる魅力向上に向けた取り組みを推進する動きの中で発案されました。アートに着目した背景には、豊島区の「国際アート・カルチャー都市構想」があります。これは、2014年に消滅可能性都市と指摘された豊島区が、危機感から地域の独自性を追求しようと掲げたもの。「地域貢献を考えると、区の方向性に沿う活動にしたい」と思い、身近に取り組めるアートで何ができるか模索しました。そう話すのは、まちづくり推進部の小野田健太さんです。

そんな中で、気軽に参加しやすいアートを探していた当時の担当者が出会ったのが、ニットアーティストの編み師^{ニイマルサンゴウ}203gowさんでした。美術館展示の他、編み物を通じて地域で多世代と交流している203gowさんと、豊島区にゆかりのあるフクロウをイメージし、公園や施設などを編み物で飾るアートプロジェクトを企画。編み物という親しみのあるもので、まちを彩れたらと考えたそうです。ちょうど豊島区池袋では、公園が整備され、注目されていたことも実現を後押ししました。また、第1回目の2021年当時はコロナ禍だったため、少人数での

ワークショップを行いつつ、自宅でモチーフを編んで送る形での参加を全国に呼びかけました。結果、予想を大きく上回る約5000枚のモチーフが集まり、話題になったそうです。

みんなで編み物をする 自然と会話が生まれる

編んでつなぐまちアートの最大の目的は、編み物を通じたコミュニティづくりです。2024年は、8会場で計27回、モチーフを編むワークショップを開催。延べ約430名が参加しました。平日の日中は近隣の主婦が中心で、土日になると子どもや大学生なども含め、老若男女問わずさまざまな人たちが集まりました。区内外から人が集まり、中には八王子から参加した外国人の方もいたといいます。2021年のように、全国から郵便で自分で編んだモチーフが送られてくるケースもありました。

あるワークショップでは、4人1組でテーブルを囲んでモチーフを編みました。参加者の多くは編み物に関心のある経験者で

したが、たまたま近くでやっていたので参加したという初心者もいて、レベルはまちまちでした。講師がそれぞれの進捗状況を見ながら指導にあたりましたが、参加者同士「進んでいますね」「それはどうやるんですか」「ここは難しいね」など言葉を交わして教え合う姿も。初対面の人も隣り合わせで一緒に手を動かせば、自然と会話が弾むと小野田さんは言います。編み物はコミュニティづくりに適していると、実感したそうです。

こうして編み上げられたモチーフは、手作業でつなぎ合わせて各会場に飾り付けます。2024年は、イケ・サンパーク、サンシャインシティ・サンシャイン60展望台、JR池袋駅の「いけふくろう」像など6カ所に展示。ワークショップ後に参加者と飾り付けたりもしました。

「飾り付けをしていると、今年もこの季節になったんですね、とまちの人から声をかけられることもありました。また、ワークショップに毎年参加してくれる方もいらっしゃって、継続することで取り組みが浸透していく手応えがありました」

見慣れた景色を一変させるアートが まちの個性を発信する

編んでつなぐまちアートは、暖かみを感じさせる冬の彩りとして、他のエリアにはない池袋の個性を発信し、新たなまちの顔となりました。

「自然と人の目に触れる場所に展示していたため、影響力がありました。見慣れた景色が変わることに対するリアクションは大きく、人の気持ちに働きかけるアートのパワーを感じました。その成果としてSNSで多くの注目を集める一方、表現に対するネガティブな意見もありました。芸術は心に響くからこそ人によって受け止め方が違うのだと、実感する機会となりました」

このプロジェクトは、「編む」という行為を通してアートに参加できる仕組み。自分で編んだものが、イケ・サンパークやいけふく



4

ろうなど非常に目立つ場所に飾り付けられます。それを探しにくるのを楽しみに、街へ足を運ぶ人も多かったそう。編み物は、アートに詳しくなくても参加しやすい気軽さがあります。それが多くの人を巻き込み、広がりを生んだのかもしれない。

「会社としても、アートを通じた地域活性、地域貢献に取り組めたことは大きな実績になりました」と、小野田さんは振り返ります。講師を務めたアーティストの拠点で開催したワークショップでは、企業としては見えにくい地域のネットワークが垣間見えたと言います。

地域活性のモデルケースとして 今後の広がり期待

アートプロジェクトは4年間で一定の目的を達成し、2024年度で終了しました。プロジェクトチームの一員で、イケ・サンパークの指定管理会社でもある日比谷アメニスは、この経験を生かして別の公園で同じような取り組みを行いました。今後は、このアートプロジェクトが他の地域に広がっていくことも期待できます。

一方で、今後検討すべきポイントも見えてきたと言います。「地域活性を目指す取り組みは、いかに地域の人を巻き込むかが重要ですが、その大変さを痛感しました。また、中長期的な時間をかけて取り組む必要があるため、ゴールが見えにくい。

KPIの指標をどう設定するのか、工夫が必要です。また、年々参加者の数を増やしながらもスケジュールどおり進行し、かつアートとしてのクオリティを保つには、常に試行錯誤が求められます」

編んでつなぐまちアートでは、JR池袋駅のいけふくろうがプロジェクトのシンボルとしてSNSで話題になるなど、大きな役割を果たしました。

「多くの人が行き交う駅は、アートを展示する場所としてインパクトがあり、ポテンシャルの高さを感じました。鉄道会社など、企業が積極的に参加すると、地域のアートプロジェクトはもっと面白くなるかもしれません」



1



2



3

神戸六甲ミーツ・アート <https://rokkomeetsart.jp/>

総合ディレクター 高見澤清隆さん

きっかけは阪神・淡路大震災 現代アートで観光復興を

神戸の街を眼下に望む、都市から近いレジャースポット、六甲山。一帯では2010年から毎年秋に現代アートの芸術祭が開かれ、自然の中を散策しながら個性豊かなアートに出会うことができます。16回目を数える今年には「神戸六甲ミーツ・アート 2025 beyond(ビヨンド)」(以下ミーツ・アート)の名称で、8月23日から11月30日まで開催。61組のアーティストの作品が、屋外を中心に六甲山を彩ります。

「来場者は、ほど近い神戸や大阪からの方が圧倒的に多いですね」と話すのは、総合ディレクターを務める高見澤清隆さん。「宿や交通の手配など、入念な事前準備が必要な地方での芸術祭が多い中、ミーツ・アートは朝起きて天気がいいから行ってみようという感覚で行ける手軽な距離感が魅力です」

主催するのは、六甲山観光株式会社とその親会社である阪神電気鉄道株式会社。運営するレジャー施設の利用促進も

含めた六甲山の活性化を目指しています。「ミーツ・アートを始めた目的は、1995年の阪神・淡路大震災後に減った人の流れを、六甲山に戻すことでした。震災復興は都市部から進んだため、六甲山の観光復興は後手に回っていると感じていました」と、高見澤さんは振り返ります。当時は、六甲山の各所に彫刻を設置する案も検討されました。しかし、新潟県の「大地の芸術祭」を参考に、六甲山に新しい文化や体験をもたらす「コト」を生み出そうと、今の形を選択。一時的な集客を狙うよりも、六甲山の環境や歴史などもふまえた新たな文化の発端となるよう、現代アートの展示会を始めました。

「明治時代、神戸港開港に伴って居留した外国人が、六甲山をレジャーのための遊び場にしました。六甲山には、そんな新しい価値観を受け入れる土壌があったので、既存の価値観に縛られない現代アートは取り入れやすいと考えたのです」

六甲山に点在する既存の施設なども含めて広く回遊してもらうため、場所ごとの魅力を生かしたり、ギャップを狙ったり

と考えながら、展示構成やアーティストの選定が行われました。「六甲山全体の集客の回復はもとより、回遊性向上や既存施設の認知拡大という課題解決の手法として、展示会をデザインしました」と、高見澤さんは説明します。

子供のころの体験を サステナブルな観光の起点に

来場者は、ミーツ・アートを目指してくる人よりも、たまたま六甲山へ遊びに来た人のほうが多いと言います。

「歩いていたら偶然アートに出合う『ストリートアート』的な芸術祭です。現代アートとのファーストコンタクトの場として、役割を果たしていると思います」

そんな文化事業的な側面もありながら、企業として収益や成果は追求します。常緑樹も多く山全体が色づくわけではない六甲山は、秋の集客が課題でした。開始以来その時期に芸術祭を開催しているのも、企業戦略です。ミーツ・アートの事業評価は、鑑賞パスポートの販売数を指標

にしていますが、収益面ではまだまだいけると高見澤さん。そこで新しい取り組みとして、子どもを対象にした無料招待やアート作品への参加を実施し、ファミリー層の集客に力を入れ始めました。「子どものころの楽しい記憶がきっかけとなって、成長後も恋人や家族と来てもらえたら。それがサステナブルな観光のあり方ではないでしょうか」

さらに2022年からは、夜間帯専用の鑑賞パスポートを導入しました。夕方以降の観光コンテンツが乏しい六甲山でしたが、今では夜の展示を目的に訪れる人も増えました。努力のかいあって、チケットの販売数は年々伸びています。

「言語」をすり合わせて協働する アーティストと企業

ミーツ・アートが他の芸術祭と異なる特徴は、行政ではなく民間企業が収益事業として開催している点。前例がないため、毎年試行錯誤を繰り返してきました。例えば、アーティストと企業の世界では「言語」が違うため、密なすり合わせが不可欠です。アーティストは、創作の過程で計画を大きく変更することも珍しくありませんが、企業では事前に決めた目標の達成に向けて、効率的に動くことが一般的です。進行上の苦労が想像されますが、「企業の視点をアート活動に取り入れてもらうのは面白い実験だ」と、高見澤さんは互いの違いを楽しんでいるようです。

また、アーティストが人生をかけて表現を突き詰める「覚悟」と「しつこさ」に企業が伴走することも大きな刺激で、学びが多いと言います。

「最近、企業のセミナーなどで、アーティストの創造的な思考法をビジネスに応用する『アート思考』という言葉が聞かれます。既存の価値観を一度リセットして再解釈し、固定観念にとらわれない物の見方を模索する姿勢は、会社の新規事業や顧客開拓のヒントとして非常に参考になるものです」



© Yoshitomo Nara

4

社員一丸で続けた芸術祭が 沿線価値を高める

芸術祭は数年に一度行うのが一般的ですが、工夫を重ねながら年に1度の高頻度で続けてきたことで認知が広がり、若い世代を始めとする幅広い層が来場するようになりました。また、開催当初は低予算の収益事業という性格を理解してくれるアーティストを探して依頼していましたが、認知度が上がった今では参加希望も増えています。また、神戸市をはじめ、行政からも継続性などが評価され、5年前から支援を得られるようになりました。そこに阪急阪神ホールディングス株式会社の援助も加わり、さらには海外からもアーティストを招聘できるようになりました。

ただ毎年の開催では、今年の会期が始まる前から次回の準備を進めなければならないため、より効率的な実施計画や運営が目下の課題です。現在はアートの専門家への外部委託もしていますが、当初の運営事務局は高見澤さん1人。その後、六甲山観光の社員が加わりました。同社ではもともと博物館に相当する施設を運営しており、アートの知見がある社員を社内リソースとして活用できたために人件費が抑えられ、合理的な収支構造がなかったと言います。

もう一つの課題は、アートプロジェクトの質を高め収益事業として来場者を満足

させつつ、行政の援助のもと社会性を維持していくことだと、高見澤さん。「年々規模を拡大し、16年前と比べたら夢のような状況」と目を細めますが、「運営側としてはどちらかに偏ることなく、その時々で変化するミッションをこなしていくスタンスです。毎年の反省を生かしながら、背筋を正して日々頑張っています」。

阪神電気鉄道としては、神戸市街地から山上のレジャー施設までをつなぐ鉄道、バス、ケーブルカーといった交通をシームレスに連携させ、沿線全体で乗客数を伸ばすことが重要な課題です。「観光商材」として芸術祭の質を高めていくと同時に、企画乗車券など阪神グループ全体での展開も視野に、沿線価値の向上を見据えています。



1



2



3

パイオニアに聞く 媒介としての芸術祭とアートが地域にもたらすもの

四半世紀の間、美術館の中にとどまらないアートの在り方を模索し続け、

パイオニアとして最前線に立ち続けてきた人がいます。

芸術祭の黎明期から、立役者として地域の現場を見つめてきたアートディレクター、北川フラムさんです。

現在も日々各地を飛び回る北川さんに、芸術祭が地域づくりのモデルとなる理由を伺いました。

アートを巡る移動で地域ごとの営みを感じ 人間本来の在り方を取り戻す

株式会社アートフロントギャラリー 代表 北川フラムさん

都市と地域をシャッフルする芸術祭で 地域は「第二の故郷」になる

—総合ディレクターとして、多くの芸術祭を手がけてその地域を活性化し、大きな貢献をしています。どのような思いで取り組んでいらっしゃいますか。

北川：最初に手がけた芸術祭は、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」です。1996年に新潟県の十日町市を中心とした6市町村の合併政策として構想され、2000年にスタート。3年ごとに開催し、2024年には9回目を迎えました。今年で6回目を迎える、瀬戸内の海と島をアートでつなぐ「瀬戸内国際芸術祭」、千葉県市原市の「房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス」、石川県珠洲市の「奥能登

国際芸術祭」なども手がけてきました。

僕が芸術祭に取り組むのは、主に過疎の地域です。アートプロジェクトに地域の内外から人を引っ張り込み、過疎が進む町全体の活性化を図ることが目的でした。そのためにはまず、地域を根本的に見つめ直し、その地に生きてきた先人や今生きている人の現実的な生活に敬意を持つことから始まります。そこには、自然とともに生きる暮らしの中で積み上げられ、伝えられてきた知恵と、ものづくりの伝統があります。

一方、都市には刺激と興奮と絶え間ない競争があります。情報があふれ、常に効率が求められる環境の中では、隣の人の顔も知らないし、ましてや挨拶することもない。都市に暮らす多くの人は、このような生活に息苦しさを覚えているのではないのでしょうか。だからこそ、効率以外の原理

がまだ大切にされている地域は残っていかねばいけないですし、地域と都市の人をシャッフルしていかないとけない。都市に住む人々が地域の芸術祭を訪れることによって、その土地がなじみ深いファミリーな場所、言うなれば第二、第三の故郷になればいいと思っています。

アートを成立させるプロセスが 人をつなぎ地域を活性化する

—地域の活性化という側面において、アートはどんな役割を果たすのでしょうか。

北川：作品そのものだけでなく、アートを成立させるためのプロセスが面白く、地域活性にとって大きな意味があります。例えば、作品を設置する場所を決めるには、家の持ち主、土地の所有者、関係者、集落の人々などそれぞれに趣旨を説明し、理解してもらわなければなりません。許可がおりたら、今度は片付け。古い空き家を使わせてもらうことがよくあるのですが、戦前の建物であれば約百年分の片付けですから、その労力は並大抵ではありません。そうやってさまざまな問題をクリアしていく中では、たくさんの人が関わり交流が生まれます。いろいろな意味で、人間の関係性を複雑につくっていくことができますから、そのネットワークの広がりが地域づくりの

モデルになるんだと思います。

大地の芸術祭では「こへび隊」、瀬戸内国際芸術祭では「こえび隊」という、芸術祭を支えるボランティア組織があります。地元住民はもとより、地域や世代、職種も異なる人々の集まりで、首都圏を中心に日本全国や海外から参加しています。加えて、規則もリーダーもない自主的な組織なのです。彼らは大変な苦勞を共にしながら、運営を手伝っています。都市から来る人は、学生や芸術祭フリークのような人で、地元の人々は

大抵農業などをやっているお年寄りです。お互いに普段は触れ合う機会の少ない、価値観の全く違う多種多様な人たちとの出会いが、素晴らしい化学反応を起こすのです。また、アートには決まった形はありませんから自由度が高く、さまざまな要素を絡めることができます。地域の人にとっては見慣れた田んぼや畑、古い家や農具でも、アーティストは特別な魅力を見いだして表現に取り入れます。そうして生まれた作品は、その土地でしか成立し得ないサイトスペシフィック^{*}なアートとなります。

—これまでの芸術祭の中で、特に印象に残っているサイトスペシフィックな作品はありますか。

北川：奥能登国際芸術祭での塩田千春さんの「時を運ぶ船」ですね。塩田のある海岸

が見渡せる場所に立つわれなくなった元保育所に、塩田用の砂取舟を置いて赤い糸を張り巡らせた作品です。塩田さんは、珠洲の製塩を継承してきた人に触発され、制作しました。他にも、大地の芸術祭で田島征三さんがつくった「絵本と木の実の美術館」や、イリヤ&エミリア・カバコフの「棚田」、クリスチャン・ボルタンスキーの「最後の教室」、2024年に岐阜県下呂市で開催した「南飛騨Art Discovery」での弓指寛治さんの「民話、バイザウェイ」などは、どれもその土地だからこそ生まれた作品です。

サイトスペシフィックな作品というのは、その土地の歴史や生活、風土や文化などどんなものを表現してもいいからすぐ面白い。土地が持つ個性は、もちろんいいものばかりではありません。満蒙開拓団として旧満州に移住した地域の人々の歴史などをひも解いた「民話、バイザウェイ」は、実際に起こった悲劇を表現しています。一見暗い歴史や社会課題といった地域のプロフィールも、作品に成り得る。重たいリアリティもアートを通して伝えられるといいと、僕は思っています。

作品を巡って地域のリアリティを体験 すれば、人は元気を取り戻す

—北川さんが手がける芸術祭では作品が点在しているので、来場者は地域

を回遊することになります。そこにはどのような意図があるのでしょうか。

北川：大地の芸術祭では、最初から約50カ所に作品を点在させていました。当初は来場者が少なく、エリアを結ぶバスは「空気を運んでいる」と言われ、「今からでもいいから作品を1カ所に集めてはどうか」と会期中に変更を迫られたくらいです。でも、そこは譲れなかった。1カ所に集めると、便利で効率的な都市に似てしまうからです。

私は、地域やコミュニティを「単位」だと思っています。「小さな単位」ほどリアリティがあるから、それを体験してもらうために、多少行きにくい場所にも作品を分散させているのです。越後妻有でも瀬戸内でも、交通手段が限られるので、訪れた人たちは道中の移動をどうするか、能動的に考える。例えば、瀬戸内は島ですから、船が来なかったら島を出ることもできません。もし乗れなかったらと早々に並び始め、1時間以上船を待つ人も少なくありません。5分ごとに電車が来る都市の生活では、受動的に動いても事足りるので、さほど考える必要もありませんが、田舎に作品が分散する芸術祭では「考える旅」ができる。それはとても重要なことで、生きていくための基本的な作法であり、人間が元気であるためのベースだと思っています。

そして、普段と違う場所を見て歩くという



撮影：Mao Yamamoto

きたがわ・ふらむ

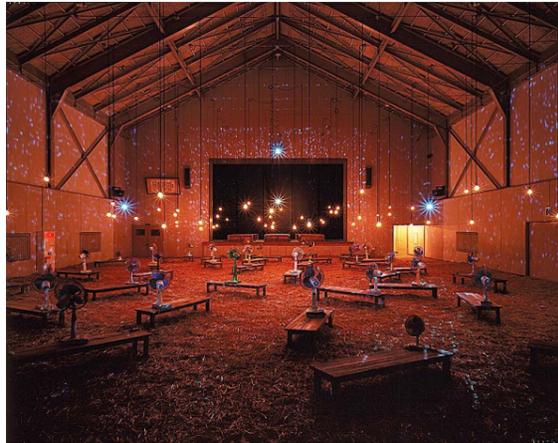
アートディレクター。1946年新潟県高田市（現上越市）生まれ。東京藝術大学美術学部卒業（仏教彫刻史）。1982年、株式会社アートフロントギャラリーを設立。アートによる地域づくりの実践として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（2000～）、「瀬戸内国際芸術祭」（2010～）、「房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス」（2014、2021）、「北アルプス国際芸術祭」（2017、2021、2024）、「奥能登国際芸術祭」（2017、2021、2023）、「百年後芸術祭～環境と欲望～内房総アートフェス」（2024）、「南飛騨 Art Discovery」（2024）で総合ディレクターを務める。



左／こへび隊は、作品管理、作品制作、案内やツアーガイド、雪掘り、農作業、地元のお手伝いなどの活動を通年でサポート。これまでに、地元や首都圏を中心に国内外から3000人以上が参加している（撮影：Noriko Yoneyama） 右／奥能登国際芸術祭の塩田千春「時を運ぶ船」。日本で唯一古代から続く珠洲の揚浜式塩田を、一人になっても守り続けた職人にインスピレーションを受けた作家は、塩田に自身のルーツを重ねた（撮影：Kichiro Okamura ©JASPAR, Tokyo, 2025 and Chiharu Shiota）



※ その場所の特性や固有性を重視する考え方や手法



左／清流の国 文化探訪 南飛驒Art Discoveryに出展された、弓指寛治の「民話、バイザウェイ」。あぜ道や山中の遊歩道に点在する、地域に伝わる民話やコミュニティの歴史を伝える文章と絵を、一つ一つたどる。戦時下、満蒙開拓団として最期を迎えた人々の物語を表現した（撮影：Osamu Nakamura） 右／大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレのクリスチャン・ボルタンスキー＋ジャン・カルマンによる「最後の教室」（2000年～）は、廃校になった小学校を利用して「人間の不在」を表現した作品。一般公開に先立って行われた内覧会には、地域のお年寄りが多く参加。その際、持ってきてもらった地域・学校にまつわる物は、最も奥にある小さなスペースに集められている（撮影：T.Kuratani）

ことがどれだけ面白いのか。今や、越後妻有も瀬戸内も、リピーター率は4割を超えています。「空気を運んでいる」と言われた大地の芸術祭のバスはツアーにもなり、2024年は約1億5,000万円を売り上げました。

―芸術祭の域内での移動には課題も多いと思っていたのですが、むしろそこに醍醐味があるのですね。

北川：そもそも、移動することは、人間を元気にします。中でも新しい場所を回る移動は、人間の気持ちを変えたり、リセットしたりすることができます。特にアートを巡る移動の中では、新たな発見ができる。

僕は、1週間のうち5日は始発で地方に出かけて終電で帰るような生活です。列車での移動は味わいがあって好きですね。列車は、移動の自由を支えるという重要な役割も担っている。過疎化が進む地域では、鉄道の維持は相当厳しいですが、各社とも一生懸命がんばっています。房総半島を走る小湊鉄道もまさにそう。少しでも力になると、いちほらアート×ミックスは小湊鉄道沿線に展開しています。

―移動が人間を元気にしたり気持ちを変えたりできるということについて、もう少し詳しく聞かせてください。

北川：今の時代は情報処理の能力が何よりも重視され、ある意味、人がロボット化されてしまっているようなところがあります。けれど、人間は五感を通して物事を整理する生き物です。五感を刺激し、能動的に考える移動をすることによって、人間本来の在り方を取り戻せるのではないかと思います。

「よく見る、よく歩く、よく考える」という仏教の基本的な教えがあります。データを見て合理性だけを重視しパッと進めようと、何も感じなくなってしまいます。情報が全部頭に入っている、それは記号が頭の中をすごいスピードで動いているだけで、体感としては何もありません。それに対して、移動は時空間を能動的に体験できる最たる方法です。人間は、体験を通して、よく見てよく考えることが大切です。

―だからこそ、作品をその土地の風景の中に置くのですね。

北川：20世紀は、均質な生活空間や都市空間が生まれた時代。鉄筋の高層ビルを造り、空調でコントロールして安く効率的な空間をどんどん増やしました。機会均等という意味でそれは素晴らしいことだったけれども、それぞれに個性が違う人々が均質な空間に閉じ込められると息苦しく感じるもの。どれも同じに見えるホワイト

キューブと言われる白い箱型の美術館やギャラリーも、そんな現代的な都市の一部です。芸術祭をやるには均質性や効率性をいったん脇に置いて、地域固有の現実を見つめ直し、その中でどう作品を見せるのが重要だと思っています。

継続の鍵は、異質なアートをめぐってぶつかり合う人間関係

―芸術祭が地域づくりのモデルになるというお話がありましたが、地域の人々からはどのような反響がありますか。

北川：地域の人たちにとって芸術祭は、外からたくさんの方が来るという初めての経験になるわけです。最初はみなさん多少なりとも抵抗があるのですが、やはり興味はあるようで、普段出会わない人に会うというのは本能的にもすごく面白いことなんだと思います。大地の芸術祭でも瀬戸内国際芸術祭でも、良かったことは何かを聞いたアンケートでは、「人との出会い」という答えが1位です。しかも、芸術祭を訪れた参加者、迎える側の地域の人々の双方に、同じ結果が出ています。

2003年の2回目の大地の芸術祭の翌年秋に、新潟中越地震がありました。大変な状況の中でも、越後妻有の人たちは2006年

に予定されていた3回目をやりたいと言いました。それは、地域の人から面白いと認められた結果だったと思います。

また、アートには「変な壁」としての役割があります。異質な現代アートが入ってくると、地域の人々は文句を言います。けれど、文句を言うのは地域への真剣な思いがあるからです。変な壁として突然現れるアートに真剣にぶつかるからこそ、本質的な課題が見えてきます。むしろ、最初に壁があるほど、結果として良い人間関係が築けます。反対した人ほど、後には誰よりも協力的になり芸術祭に積極的になります。そういう人たちが今、芸術祭を運営するコアな人材になっています。

―芸術祭による地域活性化を成功させるための重要なポイントは何かですか。

北川：コミュニケーションをできる限りオープンにして人間関係をつくることです。最初、地域の人々の多くは、莫大なお金を使って何を始めるのかと疑心暗鬼で、警戒します。越後妻有でもたくさん批判を受けました。しかし地震の後、アーティストやこへび隊などのサポーターがボランティア活動を続けたことで、地域との信頼関係が築けました。3回目から雰囲気が変わった実感がありましたね。



左／伝統的な稲作の情景を表現した言葉と、棚田で農作業をする人々の姿をかたどった彫刻を配置した、大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレのイリヤ&エミリア・カバコフ「棚田」。展望台からは、詩と風景、彫刻を一つの作品として見ることができる（撮影：Osamu Nakamura） 右／大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレのマリーナ・アブラモヴィッチ「夢の家」は、築百年以上の古民家を使った泊まれるアート作品。この古民家の大掃除をしたこへび隊との交流もあり、最初は警戒していた地域の人々が、今では管理人としてゲスト対応を担っているという

さらに重要なのは、不合理さを生かすことです。「最新の情報を最大限に集めて、最短でアクセスする」というのが都市の価値観です。その反対に、アクセスを徹底的に非効率にしたことが芸術祭を成功に導きました。点在する作品の間を移動する過程で、自然を感じ人と出会い、リアルな時空間を体験することが多くの人々を呼び込んでいます。

越後妻有では、芸術祭を開催する年で200人余り、開催しない年でも約100人の雇用を生んでいます。何もない所にそれだけの雇用を生めば、成果として認められます。また、大地の芸術祭は3年間で約6億円かかりますが、十日町と津南町が出資しているのはそのうちの2割。あとの8割は入場料と寄付・協賛金で賄われています。2割の負担でできるなら、町としても無理がないわけです。

何もない場所であっても人の営みは全てアートになる

―鉄道会社が都市近郊で芸術祭をやるとしたら、どんな可能性が考えられるのでしょうか。

北川：都市的な形態でやることになるでしょうから、地元企業との協力体制をより

強固にするなど、これまで手掛けてきた形に補助線を引く必要があると思います。

不合理さという意味では、利用者が減る地域でも、インフラとして列車を走らせることが求められる鉄道会社は、不合理を抱えているともいえるのですから、それを生かすべきです。駅を拠点にいろいろなことができると思います。

―最後に改めて、芸術祭におけるアートが持つ意味とは何でしょうか。

北川：「美術」という日本語の訳語がありますが、本来のアートという言葉が意味するところは、単に美しいものでも、飾って鑑賞するものでもありません。できあがった作品を指す言葉ではなく、「自然と人間、社会が関わる方法」なのです。古くからアートが人間の一番の友達であることは確かです。ラスコーやアルタミラに残る洞窟壁画を見ても、絵を描くことは生活そのものでした。ご飯をどう作るか、竹をどうやって道具にするか、それだけで十分アートです。ですから、何もない場所であってもそこに人が生きていれば、それが既に表現のインスピレーションになる。アートになるのです。そして、そのアートを成立させるために手間ひまをかける芸術祭のプロセスが人間関係を育み、地域をつくっていくのです。

駅消研の 体験ルポ

研究員がまちへ出て、
気になる事例を体験します！

千葉国際芸術祭2025 参加型アートプロジェクト

アートの制作プロセスに関わるワークショップでまちと出会い直す

研究員：和田桃乃

今年、初開催を迎える「千葉国際芸術祭」では、一般の参加者が加わる多彩なプロジェクトが行われています。プロジェクトにおけるアート表現のプロセスとして用意されているワークショップのうち、穴掘りと対話を体験する2つに注目し、参加してきました。

【体験①】 穴掘り ワークショップ

千葉で縄文土器などが出土していることを背景に、地元の土を使い、野焼きで焼成した器が、1万年後に発掘されることを想定したインスタレーション作品のためのワークショップです。穴を掘って材料となる土を採掘。掘り跡の風合いも作品の一部となるよう、重機を使わずスコップで丁寧に掘り、穴を現代の「遺跡」として展示します。

実感を伴う手作業で 地域との関係を築き直す

この日の参加者5人で、約2時間にわたり、住宅街の空き地で「穴掘り」に没頭しました¹²。掘る穴が思ったよりも大きく、参加者たちは悪戦苦闘していましたが、プロジェクトを主宰するアーティスト集団「手と具」の陶芸作家・外山慧さんの「こういうのはダラダラやったほうがいい」という一言で、参加者に一体感が生まれ、穏やかに作業が進んでいきました。

参加者はみな、ここまで本格的な穴掘りは初めてだったのですが、一人の参加者が「これ、雪かきみたいだ!」と共通点を発見。雪国出身の私も胸に落ち、初めて訪れたこの場所に故郷のような特別な感情が湧きました。また、千葉は土器が多く出土すると聞いてはいましたが、掘り進めていくとあっさり貝塚が出現したことにも驚きました³。

土の匂いや地層の色合い、スコップが当たる感触や音など、身体さまざまな感覚が刺激され、千葉とふるさと、現代と古代の不思議なつながりを感じる体験でした。

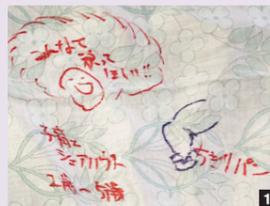


「見える対話」が 地域や人のつながりを深める

最初の自己紹介で子どもの話をしたところ、対話相手が私の落書きの横に子どもの腕のイラストを描いてくださいました¹。1枚の布を共有して互いに書き込むことで「言葉が受け止められる瞬間」を感じ、心が躍りました。

今回は千葉市初来訪だったのですが、対話相手の多くが千葉市にゆかりのある方でした。おかげで、みなさんがまちについてのイラストやキーワードを布に書いて説明してください、スマホに頼ることもなく約2時間があっという間に経過²。打ち解けていくとともに、落書きが増えていきました。「まち→人」ではなく「人→まち」という順で理解が深まったことで、より千葉というまちの解像度が上がりました。

個性あふれる対話の軌跡が布の上で共有されたことで、最後の発表コーナーでも参加者の好奇心あふれる質問が炸裂³。人や地域のつながりが対話という形で現れて広がり、可視化されていく様子に立ち会えたことに、とてもワクワクしました。



【体験②】 「対話について」 ワークショップ

対話そのものに作品性を感じていたアーティストの前島悠太さんが、友人との対話をメモしていた経験から着想を得たプロジェクトです。1対1や3~4人のグループで自由に対話しながら、みんなで1つの布に落書きしていきます。布のちにつなぎ合わされ、その場所に「旗」として立てられます。当日は10人が参加しました。

THINKING

座談会 》

経済指標だけでは測れないアートの力で 沿線や企業の価値を高める取り組みを

今号では、アートが地域活性にもたらす効果や、その可能性を探ってきました。

人やまちをつなぐアートを通じて、鉄道会社はどう地域と出会い直し、沿線の価値向上を考えることができるのでしょうか。

ゲストには、横浜市の黄金町でアートによるエリアマネジメントに携わってきた

京浜急行電鉄の佐々木忠弘さんをお招きし、沿線でアートをどう取り入れるといいのか、意見を交わしました。

身近で当たり前ものを再発見 いつもの風景を変えるアートの効果

松本：今回は、アートによる沿線の地域活性について、検討してみたいと思います。取材を通して、印象に残ったことはありますか。

和田：地域の芸術祭では、通常2~3年のスパンで時間をかけて準備に取り組むそうですから、「神戸六甲ミーツ・アート」のように毎年開催するには、大変な労力を要します。運営側の相当な情熱を感じましたし、これが地域を動かすエネルギーになっていると感じました。

吉江：事例から、アートの効果として印象に残ったことが2つあります。1つは「異化」です。アートは、当たり前のように感じていた景色や身の回りのものを、全く違う何かのように見せることができます。見慣れたものと出会い直せる効果があります。「としま編んでつなぐまちアート」は、公共空間に手を加えることにより、愛着を生み出しながら異化を達成している。しかも、そこにアーティストが介在することで、アートとしてのクオリティも担保されます。さらに、原状回復が可能という点でも、秀逸です。

もう1つは、「身近な他者」の発見です。都心や都市郊外を会場として、近郊の人

たち、いわば「身近な他者」に地域を再発見してもらうという設定が面白いと思います。他者の視点を通じて、気にも留めなかった場所やモノに出会い直し、知らなかった良さに気づききっかけを、アートは与えてくれます。

佐々木：横浜市の黄金町エリアでは、2008年に初めて開催されたアートフェスティバル「黄金町バザール」を契機に、アートによるまちづくりに取り組んでおり、京浜急行電鉄(以下、京急)も関わっています。黄金町にかつて密集していた特殊飲食店の跡地は、アーティスト・イン・レジデンス^{*1}のアトリエ兼住宅になっています。特殊な背景を持つまちを、いかに来てもらえる場所にするか。そのためにはまず、近隣の人たちに関心を持ってもらうことが重要だと考えています。横浜市民だけでも370万人いるわけですから、地域の中で移動を促すターゲット設定は大事だと思います。

松本：「いちばらアート×ミックス」の場合も、市原市南部の過疎化という課題がありました。北部の人口集積地は東京へのアクセスが良いため、どうしても東京に目が向いてしまう。南部にある里山の魅力を、北部の人にも伝えたいという狙いがありました。

和田：アートは地域を改めて知るきっかけをつくれるからこそ、地域の魅力を掘り

起こし、市の南北をつなげる橋渡しができるのではないのでしょうか。

佐々木：一方で、アートによるにぎわいづくりは定量評価しづらいため、苦勞もあるのではないかと感じました。京急の場合も、アートの良さは認識していても、厳しい市況の中での鉄道会社の経営は短期志向になりがちです。アートの取り組みによる集客や企画きっぷの販売など、分かりやすい収益への貢献がないと実行や継続が難しい。結局、エリアマネジメントも含め、情熱を持った人が属人的と言われながらもボトムアップでコトを起こし、うまく定量的な成果を見つけながら、アートに取り組んでいるケースが多いと思います。

長期にわたり地域に関わる アーティストの存在も重要

松本：佐々木さん、黄金町の取り組みの現状について教えてください。

佐々木：地域でまちづくりの協議会が発生してから21年、アートによるまちづくりが始まってから17年になります。取り組みは一定の評価を得ているのですが、経済的な自立という点ではまだまだで、横浜市による財政的な支援も受けています。今後、もう一段の事業化を検討していければよ

*1 アーティストの滞在制作を支援する事業。またはアーティストが一定期間ある土地に滞在し、作品制作やリサーチ活動を行うこと



左／国内外のアーティストや工芸家、デザイナー、建築家など、さまざまな分野で活動する人を対象にした、黄金町のアーティスト・イン・レジデンス。高架下にはスタジオや広場なども（撮影：劉書佳）
右／2017年の黄金町バザールで、大岡川を横切るように展示されたプ・ユンの「揺れる家」（撮影：笠木靖之）。参加希望のアーティストは好きなエリアを選んで公募に申し込めるようにした（写真提供：NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター）

いかもしれませんが、一方でマネタイズの話ばかりになるのを快く思わない考えもあると思います。また、各アーティストが発信したい内容もさまざまであり、キュレーターのような存在も重要だと思います。

松本：「神戸六甲ミーツ・アート」の高見澤清隆さんもおっしゃっていたように、アーティストの方向性と企業の意向をすり合わせていくのは大変でしょう。ただ、アーティストは個人として強い覚悟と熱量を持って、地域での創作に取り組んでいます。アーティストと地域は、互いにどう関わっているのでしょうか。

吉江：アートは、経済合理性のロジックでは価値に転化できないものを価値化できるのではないかと思います。例えば、退廃した団地、廃墟が持つ土地の歴史は、アーティストの創作エネルギーになります。北川フラムさんが、ネガティブな歴史もアートを通して伝えられると話していたように、アートには価値や意味を転換する作用があるのだと思います。黄金町の場合も、過去の歴史を受け止めて新たな魅力を発信していくために、アーティストの存在が必要だったのではないのでしょうか。

佐々木：そうですね。黄金町の場合は、警察による浄化作戦^{※2}の後、まちの空洞化が危惧されたため、再生策として2008年に「黄金町バザール」がスタートしました。以後毎年開催し、来場者は昨年までで延べ46万人に達しています。

吉江：地域の課題を合理的に解決しようとすると、暴力的な方法になったり、望まない対立構造を生み出したりの場合があります。そんなとき、アートだとネガティブな表現を発揮できる。つまり、すぐに答えを出さず、時間をかけることを許容してくれる。地域にはさまざまな立場の人がいてそれぞれの事情があり、すぐに結論が出せないことも多い。そこに、アートが介入する余地があると思います。

このとき重要なのが、アーティストの存在です。地域に常駐し住民とコミュニケーションをとりつつ、地域の資源や歴史を発見し作品を創作していく。1人では負担が大きければ、アーティストコミュニティという形でもいい。そうやって沿線や駅単位で活動してもらい、地域の可能性を探し磨いてもらう。その対価として、創作や居住の場を相場より安く提供するというのも考えていくとよいのではないのでしょうか。

佐々木：約70名が創作活動をする黄金町のアーティスト・イン・レジデンス用の建物は、1階がアトリエで2階が住居です。京急の高架下も、一部がアトリエになっています。ここでは制作の場がまちに開かれ、いつでもその様子を見ることができます。アーティストの中には、10年以上黄金町に拠点を置き、まちづくりに関与されている方もいます。当社を含むまちづくり組織のパートナーとして、そうした方々がいないとまちが回らないというくらいの存在になっています。

松本：「いちばらアート×ミックス」の豊福亮さんも、関係性をつくるアートの一連の取り組みは時間がかかると話していました。地域の文脈を取り入れるサイトスペシフィックアートの制作も、リサーチから始まり、関係者との地道な交渉を経てようやく作品として立ち現れます。

和田：豊福さんは、「アート作品は放っておくとすぐダメになってしまう」とも話していました。だからこそ、作品を我が子のように可愛がる地域の人たちが重要な役割を果たすのだそうです。アーティストに対しても、同じような親しみを持てる交流などの仕組みがあると、より関係が強固なものになりますね。

アートを通じた体験は沿線の価値向上に貢献する

松本：視点を変える力やアーティストという存在など、さまざまなアートの強みが見えてきました。鉄道会社はどのようにアートと関わっていけばいいのでしょうか。

佐々木：京急沿線では、さまざまなアートプロジェクトを展開しています。まちづくりの現場では、常に情報発信が課題となりますが、沿線にあるアートをつなげ1つの情報リソースとして考えてみるだけで、発信力が高まるのではないかと思います。鉄道会社は、沿線の魅力を集約し発信する役割を担うべきではないのでしょうか。当社は、横浜

広域圏、三浦半島広域圏まで広げて取り組めるといっています。エリア内に人を呼び込もうとするときには、他の鉄道会社はもはや競争ではなく協力関係にあると言ってもよいのではないのでしょうか。広く賛同を得やすいアートがテーマであれば、他社ともよりつながりやすいと思います。

松本：今回の特集では、「アートと移動」もキーワードだと感じました。移動してアートを楽しむことは芸術祭の醍醐味ではありますが、思うように回遊性が高まらないケースもあるようです。

佐々木：アートを点在させることばかりが、先に立っているからではないのでしょうか。例えば黄金町は、近くを流れる大岡川が桜の名所なので、春には多くの人が訪れます。これはお花見と一緒にアートを楽しむという付帯体験が生まれるからだだと思います。アートを巡る移動の中では、どんな体験ができるのかを設計するといっています。

吉江：アートをメインに考えず、別のきっかけからアートに触れる仕掛けをつくる。その場合、鉄道会社の総合力を生かして、沿線の魅力とアートをどう組み合わせるかを考えていくといっているのではないのでしょうか。

和田：乗客が減ってしまう時期だから何か手を打とうなど、鉄道会社は集客の「空白」を埋めようと考えがちです。しかし、既に沿線にある魅力的なスポットを改めて見つ

め直し、そこからどう寄り道をして楽しみを見つけてもらうのかを考える方が、アートと親和性が高いかもしれませんね。

佐々木：今はまだあまり事例がありませんが、地域の魅力を発掘するためにアーティストと鉄道会社と一緒にリサーチに取り組む、ということも考えられると思います。中長期的に見れば、アートはシビックプライド^{※3}の向上やまちのブランド価値、地価の向上などにつながり、鉄道会社の本業である交通事業や関連の不動産事業にも必ず波及していくでしょう。

一方で、短期的な目線ではその価値を測ることが非常に難しい。エリアマネジメントの手法としてアートがより一層重視され、経済効果だけでは測れない評価指標が見つかることを今後期待しつつも、現段階では既存の指標の中で小さな実績を積み重ねていく。そのバランスを取ることで事業が継続し、アーティストからも選ばれる沿線になっていくのではないのでしょうか。



MEMBERS

ゲスト



佐々木忠弘
京浜急行電鉄株式会社
新しい価値共創室 担当部長
京急沿線のエリアマネジメント構想を主導。MaaS構築、地域モビリティ整備、公民連携などを担当する。

駅消費研究センター研究員



松本阿礼
駅の商業開発調査、駅商業の販促企画に携わったのち、2012年より研究活動を推進。一級建築士。博士(工学)。お茶の水女子大学・非常勤講師。



和田桃乃
営業局にてJR東日本およびグループ会社に担当。まちづくり領域におけるPR、情報発信、エリアマネジメント施策などに携わったのち、2024年より現職。

アドバイザー



吉江 俊
東京大学大学院
工学系研究科 講師、博士(工学)
都市論・都市計画論を専門とする。「欲望の地理学」「迂回する経済」といった独自概念を提唱する。

※2 2005年の神奈川県警察本部による特殊飲食店の一斉摘発

※3 地域を良くしていくという当事者意識に基づく、都市に対する市民の誇り

CREP さいたま芸術劇場店

公園のように好きなときに行って自由に表現
アートを通じて子どもの感性と創造力を育む遊び場



JR埼京線と野本町駅から徒歩からほど近い、彩の国さいたま芸術劇場の一角に子どもたちの楽しそうな声が響きます。ここはダイナミックな「アート遊び」ができる「CREP(クリップ)」。子どもの感性と創造力を育む遊び場で、壁や天井もキャンバスです。手足を絵の具で染めてスタンプする子や、粘土を足で踏み感触を楽しむ子も。中央には、絵の具や筆、粘土などが並ぶバー形式のカウンターがあります。画材を選ぶ子どもに合わせて低く造られ、内側は1段下げて子どもとスタッフの視線が合うようにしてあります。料金は1人2時間2,000円を基本とし、きょうだい2人目以降は半額、1歳6カ月未満と2人目の保護者は無料です。月謝制でなくチケット制なのは、子どもが好きな時に来られる公園のような環境にしたかったからだ、代表の木村歳一さんは言います。来客は、SNSの投稿などの口コミを頼りに、関東を中心に日本全国からやってきます。さいたま芸術劇場の駐車場が利用でき、子ども連れで来やすい環境が整っていることも人気を後押し

しています。CREPは子どもが自分を表現できる場所だと、木村さん。「僕が自身の子育てを通して、子どもたちに伸ばしてほしいと思ったのは、創造力や発想力、自分の考えを人に伝える力でした。それを身に付けられるよう、自由なアウトプットができる場を作ったんです」子どもの創造性を育むため、CREPには同行する大人向けのルールがあります。一つは、「何を描いたの?」という声掛けをしないこと。子どもは抽象的な表現をしたのに、無理やり答えを出すことがあるそう。「上手だね」も大人の評価がモチベーションにならないよう、言わないことになっています。代わりに、描いた絵を乾かすときは飾るように展示することで、子どもが満足感を得られるよう工夫しています。木村さんは、創作のプロセスや人と違う個々の表現、子どもの主体性・自主性も大切にしています。「主体性は自分を中心にいる状態で、自主性とは自分から動くこと。親が口を出し過ぎると、主体が

子どもから親へ移ってしまい、自発的に動けなくなってしまいます」。画材の受け渡しをパーカウンターでのセルフサービスにしたのも、子どもが自分で道具を取りにいき、好きなものを選べるようにするためです。「大人に準備してもらって絵を描くのと、自分で好きな絵の具や画材を選んで絵を描くのでは、全く違う体験になるはずですよ」と話します。木村さんはCREPのような工夫に満ちた遊び場を自ら設計したいと、現在美大で建築を勉強中。子どもの創造力や発想力、それらを伝える力を育む遊び場は、まだまだ増えていきそうです。

1. 店内中央のパーカウンターを囲むように、粘土遊び、お絵かき、木工の遊び場がぐるりと並ぶ
2. 絵の具をスプレーでアクリル板に吹き付ける遊び。天井や壁はカラフルな手形足形、落書きでいっぱい。どれだけ汚してもいいように水場やシャワールームも完備
3. 粘土は信楽焼用の土を使用。マシンから出てくる棒状の粘土を、糸を引いて欲しいだけ切り取り、ブルーシートの上で汚れを気にせず遊べる

DATA
埼玉県さいたま市中央区上峰3-15-1
<https://crep-art.com/>



Type 06

予想外も楽しい廃墟巡り

Profile
39歳 女性 会社員
未婚 神奈川県在住
1人暮らし

廃墟の旅はワクワクする冒険

Mさんは15年ほど前、ネットで写真集を見たことがきっかけで廃墟に興味を持ち、実際に現地を訪ねるようになりました。最近は、年に2、3回のペースで出かけています。SNSやブログなどで気になる廃墟を見つけると、地図アプリの航空写真で建物を探るところから始まります。場所が特定できたら、どうすればたどり着けるかを考え、移動手段や宿泊先を手配。もちろん、安全性や立ち入り許可が必要かどうか、しっかり調べます。Mさんが好きな発電所跡や変電所跡は、山の中にあることが多く、古びた橋を渡ったり、険しい山道を登ったり、なかなかハードな道のりです。「廃墟へ行くのは大変な分、たどり着けたときは『ヤッター!』と思う。冒険をしているようなワクワク感がある」と言います。

他では味わえない、侘び寂び感

好きに見て回れるので普段は一人旅ですが、湖に建物が半分沈んだ発電所跡を目指したときは友人を誘いました。陸路がないため、釣り人用のボートを借りて、廃墟へ。友人に操縦を任せて、写真を撮ったり、ぼんやりして過ごしたそう。「何十年か前には栄えていた建物が、自然の緑にのみ込まれ朽ちていく姿に『侘び寂び』を感じる」と言います。去年は、地方の民間企業が企画した地元

のシャッター商店街を巡る「廃墟ツアー」に参加し、廃業した銭湯などに立ち入ることができて、興奮したとのこと。元々キャバレーだった場所では、当時のまま残されていたシフト表やキーボトルを見て、かつてここにいた人々の営みに思いを巡らせました。夜は、商店街のアーケードのネオンが復活点灯され、ふだんは寂れた場所の一夜だけの盛り上がり、切なさやエモさを感じたりもしました。「昔の痕跡に触れることで、時間の流れを感じられるのが廃墟の魅力。普段は見られない景色に出合えるところもいい」と、他には代替できない魅力を感じているようです。

思いもしないことが、世界を広げる

そんなMさんは「旅の中で少なくとも1日1時間は地元の人と話す」と決めています。シャッター商店街を訪ねたときは、心の赴くまま気になった路地を散策し、アート教室の作品を展示していた年配の方と話を咲かせたそう。また帰り際に立ち寄ったワインバーでは、マスターや常連客と話が弾み、日帰りの予定を変更して急きょ1泊することに。Mさんが旅に期待するのは、「非日常で、予想がつかないこと」だそう。「目的の廃墟にたどり着けなかったとしても、失敗とは思わないし、ダメージもない」と言う通り、Mさんは「思っていたのとは違う」ことを面白がることで、自分の世界を広げていました。



こんな景色があるなんて!

研究員MEMO
.....
廃墟から過去の人々の営みを感じ取ったり、偶然出会った人との何げない会話に興じるなど、何でもないようなことを楽しめる、Mさんのクリエイティブな視点に注目しました。気分に合わせてテレワークの場所を変えるなど、普段の生活も自ら工夫して、楽しんでいるようです。(研究員・松本)